

仁科記念財団

案 内

2008年4月

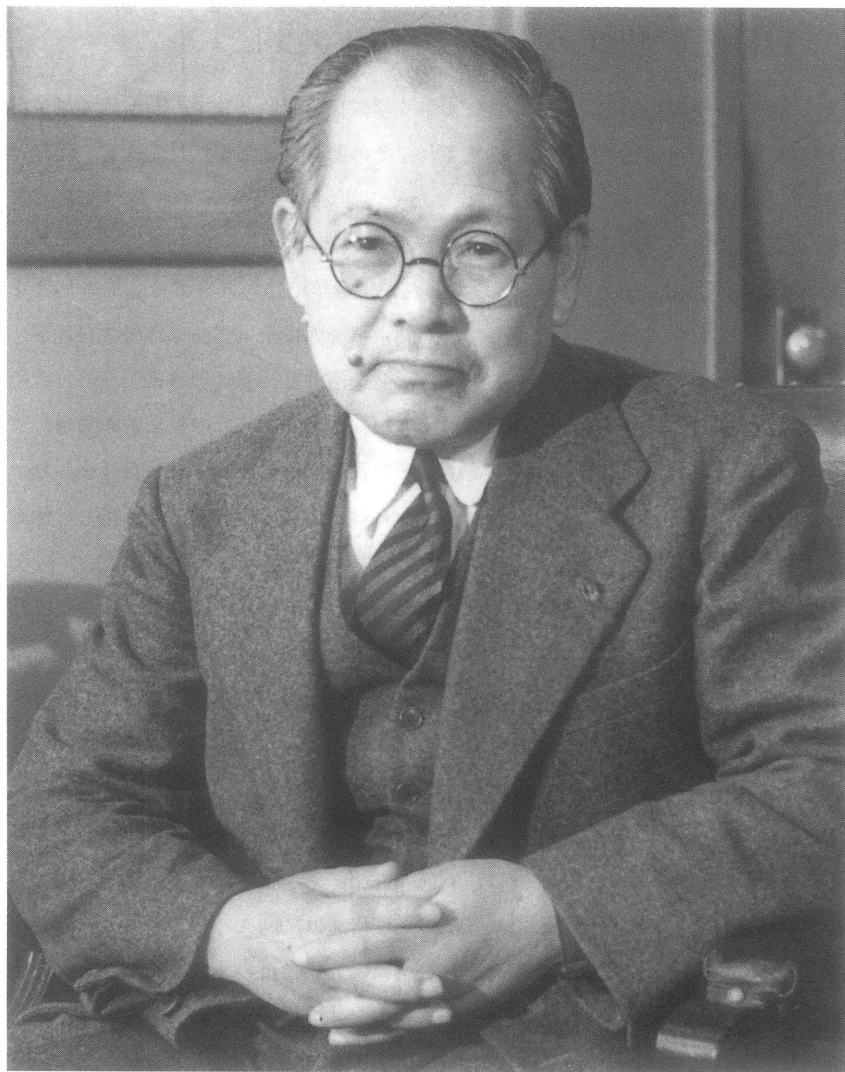


財団法人 仁科記念財団

博士は岡山県に生まれ、東京帝国大学工科大学電気工学科を卒業後、理化学研究所に入り、1921年渡欧、1923年より1928年まで当時原子物理学の中心であったコペンハーゲンのボーア教授のもとで研究した。1928年クラインとともにディラックの相対論的量子力学に基づき、ガンマ線の電子による散乱に関する有名なクライン-仁科の式を導いた。帰朝後、量子力学、原子核物理学等、当時急速に展開した新しい原子物理学をわが国に育てることに力をつくした。湯川教授の中間子論、朝永教授の量子電気力学をはじめとするわが国の理論物理学、また原子核、宇宙線の実験的研究の発展は仁科博士の指導と励ましに負うところが多い。博士みずからは、戦前理化学研究所に当時世界最大と称せられたサイクロトロンを建設したが、戦後占領軍によって東京湾に沈められた。

戦後、理化学研究所長として、また株式会社科学研究所社長としてわが国の科学技術の再建に尽瘁したが、不幸にも途半ばにして病をもって逝去された。

博士は1946年文化勲章を受け、1948年日本学士院会員となられた。



仁科芳雄博士 (1890.12.6 - 1951.1.10)

仁科記念財団案内

仁科記念財団は1955年に戦後いちばん早く学術振興財団として、わが国の原子科学の祖、仁科芳雄博士を記念して創立され、そのとき以来毎年仁科記念賞の贈呈と定例仁科記念講演会を欠かさず行い、またその他いくつかの事業を続けております。財団の設立当初の基金は、わが国財界からの寄付金2,165万円と内外学界の個人からの寄付金334万円から成るものでしたが、数年で使いきってでもその活動を有意義なものにする覚悟でした。しかし、朝永振一郎博士（当初は財団常務理事）らをはじめとする学界関係者の努力による活発な活動と、初代理事長渋沢敬三氏その他財界のかたがたのご配慮により、財団の永続が図られ、その後数次の募金によって、今日では6億円余りの基金をもち、その利子で活動するようになりました。そして最近、各界からいただく賛助会費ならびに個人の寄付金にも依拠して活動を続けています。

財団の存在の意義が広く認められ続けるためには、国内外の広い層からのご支持とご協力が必要であります。そして実際、今日まで活動を続けることができましたのは、古くからの財団関係者に限らず、多数のかたがたの温かいご支持とご協力のおかげであります。

そのようなご支持とご協力にこたえ、さらにその輪を広げることを念願して、われわれは1985年以来、この小冊子「仁科記念財団案内」を毎年発行しております。この小冊子の「案内」という名前は、戦前の財団法人理化学研究所が出していた同様な小冊子にならってつけました。戦前の「理研」は、欧文と和文の研究報告の出版のほか、毎年、各研究室の研究題目と所属研究者全員の氏名を記した質素な小冊子を出しておりました。それにつけられていた「理化学研究所案内」という、かざり気のない名称は、当時の「理研」の気風をよく表していたように思います。それにならって名づけたこの小冊子が、すこしでも多くのかたに、仁科記念財団に対して親しみをもっていただき、支持者になっていただくのに役立てば幸いと存じます。

目 次

理事長あいさつ	山崎敏光	2
§ 1. 仁科記念財団の事業概要		4
§ 2. 仁科記念賞		6
§ 3. 仁科記念奨励金		8
§ 4. 仁科記念講演会		10
§ 5. 財団出版物		11
§ 6. 財団ニュース		12
§ 7. 仁科記念室だより	並木雅俊	13
財団法人仁科記念財団設立趣意書並寄附行為		18
役員及び評議員等名簿		25
付 録		
a. 仁科記念賞受賞者とその業績一覧		26
b. 海外派遣研究者一覧		35
c. 途上国若手招聘研究者一覧		43
d. 賛助会員一覧		47



理事長あいさつ

2008年 4 月

仁科記念財団理事長 山崎敏光

仁科記念財団は2005年に創立50周年を迎え、第2の半世紀へ歩み出したところです。当財団を研究者や社会にとってさらに意義あるものとするために、皆様のお力添えをいただきながら努力してゆきたいと思います。よろしくお願いいたします。

仁科財団の50周年記念事業の一環として、半世紀にわたる仁科記念講演会の講演記録をまとめて出版し、若い人々にも読んでもらえるようにしようとの目論みは、さいわい、シュプリングァーフェアラグ東京のご協力によって実現されました。一昨年初、まず「現代物理学の創造」と題する3巻の本になって出版され、すでに第2刷になっているとのこと。これは日本語で書かれた講演録ですが、引き続き昨年末、英語の講演録がドイツのシュプリングァー本社から Lecture Notes in Physics シリーズの1冊として刊行されました。1967年のハイゼンベルク博士の講演に始まり2005年の Yang 博士の岡山講演までを含むこの講演録は、大変貴重なものとシュプリングァー社の編集ボードの方々からお褒めをいただきました。この機会に Nishina Memorial Foundation の名が国際的に知られるようになるのではないかと期待しております。この本をコペンハーゲンのオーエ・ボーア先生に贈ったところ、早速次のようなメッセージをいただきました。

I am very grateful to the Nishina Memorial Foundation for sending me the collected volume of Nishina Memorial Lectures. It is very enlightening material and an impressive testimony of the perspectives in the activities of the Foundation. It is a fitting memorial to Nishina himself. Warm greetings, as ever, Aage

中根良平，仁科雄一郎，仁科浩二郎，矢崎裕二，江沢洋の5氏が心血を注いで発

掘、編集された「仁科芳雄往復書簡集」全3巻も一昨年、完結しました。みすず書房から出版されたこの貴重な書物は、仁科芳雄先生の旧オフィスに眠っていた往復書簡を中心にしたもので、1930年代から1940年代へかけての、困難であり輝かしくもあった現代物理学の開拓者たちの生の記録です。これまであまり知られていなかった科学の発展の一こま一こまが明らかにされました。1500ページに及ぶ書簡と、それに江沢さんが付け加えられた80ページにもなる解説に圧倒されます。

これから当財団がなすべきことの一つに国際化ということがあります。当財団は、仁科博士が国際的に著名な学者であったことを反映して、設立にあたりノーベル賞受賞者15名を含む44名の外国人著名学者からの寄付をいただくなど、当初から国際的でありました。その後の活動としても、43名にのぼる超一流の学者を仁科記念講演会に招待するなど、日本の研究者と海外の研究者をつなげるフォーラムの役目を果たしてきました。半世紀の間に国際化をなし遂げたわが国で、当財団に期待されていることは、嘗て「途上国」日本からの仁科博士がコペンハーゲンで第1線の研究者と共同研究を進め、それをもとに我が国での研究基盤を築いたことを思い起こせば、いまだ発展途上にある国々からの優秀な研究者に勇気と機会を与えることではないでしょうか。もう一つは、仁科研究室の資料の調査・研究をさらに進め、その成果をひろく世の中に広め、利用していただくことがあると思います。

これらは国際的視点から行うべきものですから、財団の広報活動も国際化する必要があります。その役に立てるようにと、初めての英文の「財団案内」ができあがりました。

仁科記念財団設立の理念と伝統に照らして考えますと、当財団がやるべきことは多々あります。限られた財源の中ではありますが、有意義なことを実現できるように努力を傾けたいと思っております。

§ 1. 仁科記念財団の事業概要

ホームページ (<http://www.nishina-mf.or.jp>) もご覧ください。

1. 仁科記念賞の贈呈

広い意味の原子物理学とその応用に関し優れた研究業績をあげた比較的若い研究者に対して、賞状と賞牌及び特別研究助成金を贈呈しています。

2. 仁科記念講演会の開催

広い意味の原子物理学とその応用に関する学術の進展と、一般の関心事にもつながる諸問題を内容とした定例の記念講演会及び同じ趣旨の地方講演会を開催しています。

3. 仁科記念文庫の運営

仁科博士の蔵書及び寄贈によって追加された多量の図書を基幹とした文庫の運営を図るとともに、仁科記念室及び朝永記念室に保存されている貴重な資料の整理、編集を行い、研究者の利用に供するための作業を続けています。

4. 仁科記念奨励金の贈呈

- a. 海外の機関で研究活動を行う我が国の研究者に対し、渡航費、滞在費を含め研究活動に必要な経費を助成しています。
- b. 発展途上国の若手研究者を我が国の研究機関に招聘し、渡航費、滞在費を含め研究活動に必要な経費を助成しています。

5. 外国の優れた研究者の招聘

外国の指導的な研究者を招いて講演を依頼し、我が国の研究者との討論を通じて学術の国際交流を進めています。

6. 出版、広報及び調査

講演記録等を載せた「NKZ」及び広報誌「財団案内」の出版、仁科博士、朝永博士をめぐる科学史資料の収集、調査を行っています。

2007年度には、これまでの仁科記念講演会における英語による講演のうち、ハイゼンベルクの原稿をはじめとする18編を、Springer Lecture Notes in Physics シリ

ーズの第746巻「Nishina Memorial Lectures-Creators of Modern Physics」として
シュプリンガー社（ドイツ）から世界的に出版しました。

§ 2. 仁科記念賞

「仁科記念賞は、原子物理学およびその応用の分野できわめて優秀な成果をおさめた研究者に贈るものであります。この賞の特色は、功成り名遂げた大先輩に贈られるのではなく、むしろこれからの活躍を大いに期待される若い研究者に贈られる点にあります。」(“NKZ” 創刊号 (1962) 43ページより)

これまでの受賞者とその業績及び当時の所属を巻末に掲げます。

2007年度の仁科記念賞の受賞者と受賞業績を以下に紹介します。

2007年度 第53回 仁科記念賞 受賞者業績紹介

研究題目 細谷機構の発見

受賞者 細谷 裕

(大阪大学大学院理学研究科教授)



アインシュタインの特殊相対性理論は、われわれが住む世界は縦横高さの空間3次元と時間を加えた4次元ミンコフスキー空間であることを示している。

さらに一般相対性理論と電磁場理論を統一する試みから、4次元よりも高い次元の時空間が本当の時空であり、4次元以外の空間は現在の実験手段では探知できない程非常に小さく縮こまっているとする考えが1920年代にカルツァ (Kaluza) とクライン (Klein) により提唱され、このような高い次元の時空を考える理論は一般にカルツァ・クライン理論と呼ばれている。細谷裕博士は、このような高次元の時空を考える理論においては、電磁場の理論でよく知られているアハロノフ・ボーム効果と類似のメカニズムが、小さく縮こまった時空の内部に現れるゲージ場 (電

磁場を一般化したもの)の理論においては重要になることを指摘した。とくに、4次元時空の理論で基本的であるヒッグス機構と呼ばれるゲージ対称性を破る機構以外に、高次元の時空に基礎をおく理論ではゲージ対称性を破る全く新しい機構が存在することを世界で最初に指摘した。これは、現在「細谷機構」と呼ばれている。この考えは、10次元の時空を考える超弦理論にも持ち込まれ、超弦理論に基づく素粒子のモデルの構成においても大きな役割を果たしている。このように細谷博士の研究は、現在活発に研究されている素粒子理論および時空理論の最先端で大きな役割を果たしており、将来における現実世界を記述するより基本的な物理理論の構成に寄与することが期待される。

参考文献：

1. Yutaka Hosotani, Phys. Lett. B126 (1983) 309.
2. Yutaka Hosotani, Ann. of Phys. 190 (1989) 233.



三田教授と談笑の細谷氏ご夫妻

§ 3. 仁科記念奨励金

この研究奨励金は、我が国の研究者が海外の研究機関で研究を行うための援助「海外派遣研究者」(1956年から)や、発展途上国の研究者が我が国の研究機関で研究を行うための援助「途上国若手招聘研究者」(1992年から)等に充てられています。

海外派遣研究者については、これまで公募により候補者を募り、例年2～3名の将来性のある研究者を海外の研究機関に派遣してきました。派遣期間は原則として1年です。

なお、本財団では、他の機関や財団で行っていない事業に重点をおくとの見地からこの事業の見直しを行い、2008年度から「広い意味の原子物理学及びその応用に関連する分野の研究者が、海外の研究機関で研究又は研究支援活動を行うために必要な経費を助成する」ことといたしました。従来のポストドクトラルフェロー型だけでなく、年齢や所属の有無も問いませんので、有職者や退職者も応募できますし、また、狭い意味の研究だけでなく、研究の支援や協力などを含むことができます。派遣期間も弾力的にし、3ヶ月以上1年以内としました。

途上国若手招聘研究者については、我が国の研究機関の協力を得て発展途上国の若手研究者を受け入れ、その研究活動の支援を進めてきました。滞在期間は原則として6ヶ月です。

なお、2008年度から招聘期間を6ヶ月以上1年以内としました。

ともに学術の国際交流に大きな役割を果たしてきました。

2007年度は次の研究者にあてられました。

(1) 2007年度海外派遣研究者

氏 名 浅川嗣彦（理化学研究所基礎科学特別研究員）
派遣先 ニールスボーア研究所（デンマーク）
研究題目 ○弦理論と D-brane の非可換幾何学的構造に基づいた
新しい定式化

氏 名 深谷英則（理化学研究所協力研究員）
派遣先 ニールスボーア研究所（デンマーク）
研究題目 厳密なカイラル対称性を保つ Dirac 演算子を用いた格子
QCD シミュレーションの実現

(2) 2007年度途上国若手招聘研究者

氏 名 Phung Van Dong
所 属 Center for Theoretical Physics, Institute of Physics,
Vietnamese Academy of Science and Technology
研究題目 素粒子模型 Economical 3-3-1 model の追求とその応用
受入担当研究者 高エネルギー加速器研究機構素粒子原子核研究所
岡田安弘教授

氏 名 Ngo Van Thanh
所 属 Researcher of Institute of Physics and Electronics, Head of
Department of Computer Center and Network
研究題目 Condensed Matter Physics Biophysics
受入担当研究者 東京工業大学大学院理工学研究科 安藤恒也教授

§ 4. 仁科記念講演会

仁科記念財団は、仁科博士の誕生日にあたる12月6日の前後に、定例の記念講演会を東京で催すほか、地方講演、高校理科教員のための講演会、外国の著名物理学者の来日の折とか例えば朝永博士のノーベル賞受賞の際とかの特別講演会などを、随時行ってまいりました。定例の仁科記念講演会は、既に50回を数え、伝統を誇りうるものとなりました。

仁科博士は倦むことを知らない啓蒙家でありました。それは一般社会に基礎研究の意義を理解させる必要を強く感じられたからであります。そのような講演に、門弟たちはしばしば宇宙線用の大きなサイズの計数管を持ってお伴をさせられたものです。

仁科記念財団の二代目理事長であった朝永博士は、師の仁科博士におとらず公開講演に熱心でありました。朝永博士の独特な話しぶりは聴衆を魅了したものです。朝永博士及びそのほかの講演者たちの名講演の記録は、財団の初代理事長渋沢敬三氏の熱心な意見に従って発刊された財団の出版物“NKZ”に掲載されてきています。

2007年度は仁科記念講演会を次のように開催しました。

第53回定例講演会

日時 2007年11月29日(木)16時～17時30分

場所 理化学研究所鈴木梅太郎ホール

講師 森田浩介（理化学研究所准主任研究員）

題目 新元素の探索



§ 5. 財団出版物

公開講演会は、本財団の重要な事業の一つではありますが、来聴できなかった人々のためにも講演記録を出版する必要がある、というのが初代理事長澁澤敬三氏の強い願望でした。本財団では貴重な講演の記録を残すとともに、多くの方にこれをお読みいただけるようにするため、できる限り出版するよう努力をしています。

2007年度には、次の出版物を刊行しました。

「素粒子物理学はどこへ向かうのか」 小林誠著 (NKZ-46)

「Nishina Memorial Lectures - Creators of Modern Physics」 シュプリンガー社
(ドイツ)

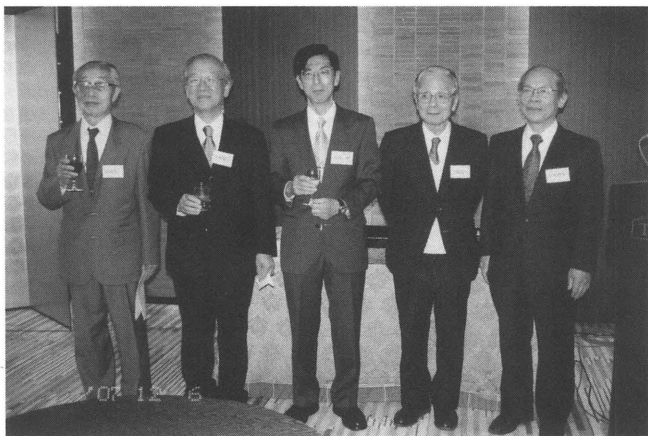
英文財団案内「Nishina Memorial Foundation 2008」

§ 6. 財団ニュース

2007年12月6日、仁科芳雄博士の誕生日に2007年度仁科記念賞の贈呈式を行い、その後に受賞者を囲み懇親会を開催しました。



贈呈式で挨拶をされる霜田光一氏



2007年度仁科記念賞受賞者と財団関係者

訃報

長い間、本財団の理事をおつとめくださいました宮島龍興氏が2007年11月26日にご逝去されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

§ 7. 仁科記念室だより

仁科記念室では、長い間眠っていた仁科芳雄博士の往復書簡の発掘をし、2006年12月に「仁科芳雄往復書簡集」(全3巻)として発刊しました。記念室に保管されているこの他の資料についても学術的な価値が高く貴重なものが多いので、理化学研究所等の協力を得て、引き続き資料の発掘、整理を進めるとともに、その利用についても検討をしていくこととしています。

仁科記念講演集の刊行

並木 雅俊

“Nishina Memorial Lectures” が、2007年度仁科記念賞授賞式の日（12月6日）に届きました。この日までに完成することは難しいと知らされていたことも重なって、手にしたときの喜びは大きなものでした。“Nishina Memorial Lectures” は、すでに刊行されている『現代物理学の創造1』、『現代物理学の創造2』、『現代物理学の創造3』に続くもので、財団創立50周年事業として計画された小冊子「NKZシリーズ」の出版はこの刊行をもってすべて終了いたしました。ここで、それに纏わる四方山話をしたく思います。

このNKZシリーズに掲載された多くの講演記録を「仁科記念講演録集」として出版することが財団で決定し、その作業の相談を始めたのは2005年8月でした。シュプリングー・フェアラーク東京（現在、シュプリングー・ジャパンと社名を変更）で発行することになり、電子データがないため、入力作業から始まりました。この間、国立科学博物館での「仁科芳雄と原子物理学のあけぼの」展の準備も始ま

りました¹。

編集は、山崎敏光理事長と共に行ないました。初期の仁科記念講演は、すでに『原子時代の科学』(大日本図書、1959年)として刊行されています。そこには、朝永振一郎「宇宙線の話」(1955年)、畑中武夫「流転する宇宙」(1955年)、菊池正士「物質の構造」(1956年)、熊谷寛夫「原子核の実験」(1956年)、萩原雄祐「太陽と地球との関係」(1957年)、石井千尋「宇宙線研究20年」(1957年)、岡小天「放射線の生物作用とその機序」(1958年)が掲載されています。括弧内は講演された年を示し、講演日はいずれも仁科先生の誕生日12月6日でした。今回の収録は、これ以後の講演となりますので、1959年6月の朝永先生の「原子論の発展」から2005年12月の西島和彦先生の「仁科芳雄と日本における素粒子物理学の原点」までの47年分が対象となります。仁科先生の誕生日前後に行なう定例記念講演会はこれまで一度も欠かすことなく行なわれていますし、その他にも80以上の講演が行なわれておりますが、NKZシリーズに掲載された講演原稿は邦文28篇と英文17篇でした。

山崎理事長、シュプリング編集部と私とで、編集会議を何度か行なって、①邦文と英文の原稿を分けて刊行する、②原稿はおよそ講演順に掲載する、③各講演記事の1頁目には講演者写真、講演日時と場所、講演者の名前にルビをつけ、当時の所属を掲載する、④表紙袖に仁科先生の略歴を載せる、⑤「発刊にあたって」を山崎理事長が執筆、⑥「編集あとがき」を私が担当、等を決めました。頁数を考慮して邦文3分冊、英文2冊とし、邦文から刊行すべく作業を始めました。シュプリングが入力を終え、初校ができたのは2006年4月で、第2校は7月でした。章の扉の写真は、山崎理事長が選びました。校正には、事務局の新井輝隆さんと板垣淑子さんにもご尽力いただきました。

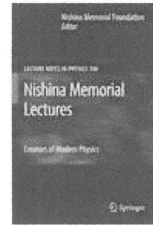
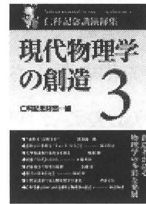
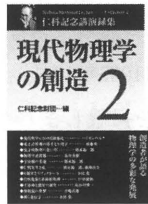
第1巻には、朝永振一郎「原子論の発展」(1959年6月)、青野雄一郎「太陽と電離層」(1959年9月)、菅義夫「電子冷凍の理論と応用」(1959年12月)、朝永振一郎「放

1 1 「仁科芳雄と原子物理学のあけぼの」展は、世界物理年(2005年)の11月12日から12月18日までの間、東京・上野にある国立科学博物館で開催されました。この展示会の準備は、第1回企画会議のあった2005年3月に開始されました。財団の中根良平先生の指導、国立科学博物館の渋谷志穂さんの尽力、それに科学史家の岡本拓司さんの協力のおかげで、大成功を収めました。

射能線の話」(1960年12月), 小田稔「宇宙の考古学」(1961年12月), 平田森三「割れ目の話」(1962年12月), 鳩山道夫「エレクトロニクス時代とトランジスタ」(1963年12月), 湯川秀樹「仁科先生と朝永さんと私」(1965年12月) の9篇の講演録とコラム「ニールス・ボーア博士のこと」(1962年) を掲載しました。全322頁+7頁でした。これらは40~50年ほど前の文ですが, 古さを感じさせない不思議な力をもっています。それに, これほど聴講者を科学の世界に誘う講演をされた先生方のすばらしさを感じざるを得ません。

第2巻には, ハイゼンベルク (柳瀬睦男訳)「現代科学における抽象化」(1967年4月), 後藤英一「電子計算機の得手と不得手」(1969年12月), 朝永振一郎「原子核物理の思い出」(1970年12月), 湯川秀樹「物理学者群像」(1971年12月), 朝永振一郎「宇宙観の変遷」(1974年12月), 朝永振一郎・藤岡由夫「仁科先生と私」(1975年5月), 小田稔「X線とブラックホール」(1975年12月), 戸田盛和「自然現象と非線形数理」(1980年12月), 長谷川博一「宇宙塵と惑星の誕生」(1981年12月), 中嶋貞雄「極低温の世界」(1982年5月), 本庶佑「動く遺伝子」(1982年12月) の11篇の講演録を掲載しました。全270頁+7頁でした。物理現象の面白さ, 何が物理の本質なのか, それにコンピュータの限界を認識して付き合うことの大切さ, どうすれば聞き手に伝わるのか, を学ぶことができます。

第3巻は, 南部陽一郎「“素粒子”は粒子か?」(1985年4月), 西川哲治「素粒子の素粒子“クォーク”をさぐる」(1983年12月), 菊池健「大型加速器で素粒子を探る」(1987年5月), 木越邦彦「放射能で年代をはかる」(1989年12月), 近藤淳「金属電子の特異な振舞」(1993年12月), 外村彰「量子的世界を見る」(2000年12月), 伊達宗行「仁科記念賞で見る物質科学の進歩」(2005年12月), 西島和彦「仁科芳雄と日本における素粒子物理学の原点」(2005年12月) の8篇の講演録と「仁科記念講演会の記録一覧表」を掲載いたしました。全275頁+7頁でした。物理学がどんな方向に進んでいくのか, どのような観点で歴史をみるのか, 教えられます。



『現代物理学の創造1,2,3』として、2006年11月28日に3巻が同時刊行されました。

英語版の編集作業は、2007年5月から始まりました。掲載対象の講演録は、久保亮五（1990年）、シュウインガー（1980年、1965年度ノーベル物理学賞受賞）、ウー（1983年）、ダイソン（1984年）、ファインマン（1985年、1965年度ノーベル物理学賞受賞）、モッテルソン（1985年、1975年度ノーベル物理学賞受賞）、シーゲバーン（1988年、1981年度ノーベル物理学賞受賞）、アンダーソン（1989年、2篇、1977年度ノーベル物理学賞受賞）、ヴァン・ホーフ（1990年）、クローニン（1993年、1980年度ノーベル物理学賞受賞）、ローラー（1993年、1986年度ノーベル物理学賞受賞）、ド・ジャンヌ（1998年、1991年度ノーベル物理学賞受賞）、クロート（1998年、1996年度ノーベル化学賞受賞）、フリードマン（2000年、1990年度ノーベル物理学賞受賞）、フェルトマン（2003年、1999年度ノーベル物理学賞受賞）、ヤン（2005年、1957年度ノーベル物理学賞受賞）の計17篇です。久保先生のは、1990年の「仁科芳雄生誕百年記念国際シンポジウム」の冒頭の講演で、仁科先生を紹介しているものなので、一番前に移動しました。

編集の際にまず気に掛かったのは、シーゲバーンの講演録のことです。NKZ-No. 30に掲載されているのですが、A4版で117頁もあります。これでは、価格面より1冊に収めたいと考えていたのですが、当初の予定どおり2分冊にしなくてはなりません。しかし、この稿の内容すべてを講演したとは思えませんでした、他の稿と同様に掲載し、『現代物理学の創造4,5』として日本語版の『現代物理学の創造1,2,3』と同じように編集するべく作業を開始いたしました。7月の打ち合わせで、何と、これを“Lecture Notes in Physics”シリーズの1冊に加えてもらえ

ることになったのです。この折衝の過程で講演録のリストと校正刷りを本社に示したところ、「Lecture Notes in Physics シリーズの編集委員19名全員が‘great enthusiasm’をもって賛成なされたということです！」と8月3日付のシュプリンガー・ジャパンからのメールが伝えています。さらに「こんなことは日本発信の企画ではとても稀なこと（物理では初めて！）で、大変嬉しく思っております」とのメールには山崎理事長と共に大いに感激し、期待に沿えるようなすばらしい本をつくろうとの方針は定まりました。

私は学生時代、このシリーズの本から学んだこともあって嬉しくなり、（現金ですが）シュプリンガー・ジャパンの情熱を感じました。また伝統ある“Lecture Notes in Physics”シリーズともなれば世界中の物理学者がその存在を知っています。そのうえ、編集部は邦文にあったハイゼンベルクの稿（1967年）も掲載したいとアイディアを出してくれました。しかし、これには英文の稿はありません。山崎理事長が財団事務室からオープンリールのテープを探し出して、ご自宅のテープレコーダーで再生してみましたら、ハイゼンベルク博士の鮮明な声と、それを聴講者に翻訳する柳瀬先生の声が流れてきたとのことでした。それで、このテープをもとにしてハイゼンベルク博士の英文原稿をつくってもらうことになりました。

しかし、本の大きさ・形、文字の大きさ・形などを含めた編集は、このシリーズの規則で行なわなければなりません。このため邦文版とデザインが変わってしまいます。しかし、文字は小さくなりましたが、1冊で収まることになりました。全402頁+14頁でした。

こうして、“Lecture Notes in Physics 746 Nishina Memorial Lectures: Creators of Modern Physics”は、完成いたしました。表紙裏は、和紙でつくられています。これもシュプリンガー・ジャパンのアイディアです。日本らしさを出してくれて感謝です。また、テープから起こしたハイゼンベルク博士の声（1967年録音）は、Springer ドイツ本社ホームページから聞くことができます。Web,
<http://www.springer.com/physics/book/978-4-431-77055-8>
 から、お聞きになっていただきたいと思います。この声のアップロードは、ドイツ本社内において聞く人に衝撃を与えており、‘40年も前の録音なのにクリアな音

声！’，‘非常に美しい英語！’，‘Splendid!’，‘Marvellous!’と絶賛のメールが届いたようです。50年を越える歴史と伝統をもつ仁科記念財団を世界に広く知らしめることに、ほんの少しですが貢献できたのではないかと考えております。

(2008年2月22日)

財団法人 仁科記念財団設立趣意書 並 寄附行為

委大第164号

財団法人 仁科記念財団

設立代表者 洪沢敬三

昭和30年11月10日付で申請のあった財団法人仁科記念財団の設立を民法第34条によって許可します。

昭和30年12月5日

文部大臣 清瀬一郎

財団法人仁科記念財団設立趣意書

文化勲章受賞者、日本学士院会員故仁科芳雄博士は、わが国の原子物理学の創始者であり、湯川博士等、世界的学者の育ての親でありました。博士が戦前、当時世界で第1級の大サイクロトロンを建設されたことは、そのサイクロトロンの悲劇的最後までともに、あまねく世に知られているところであります。

故仁科博士は、世界的な原子物理学者であったのみならず、戦後国歩艱難の時期に際しては、旧財団法人理化学研究所を潰滅の危機から救って株式会社科学研究所を興し、科学技術こそ国の救済復興の原動力であるという信念を貫かれ、身をもってこれを実践されました。博士はまた、この学識と円満な人格によって世界の学界の信望を一身にあつめられ、博士の存在がわが国の国際社会へのすみやかな復帰に大きな助けとなったことも、永く忘れることのできない点であります。

このように、わが国科学技術界の恩人であり、且つ、わが国が世界に誇るべき偉大な学者を永遠に記念するために、科学の振興、新鋭科学者の育成を目的として、

その名に因んだ事業を興すことは、これからの日本にとって、まことに意義深いことと考えられるのであります。

おもうに科学技術の振興は、国の自立復興上、万難を排して成し遂げなければならない喫緊事であります。なかんずく、博士が生前心血をそそがれた原子物理学が、人類文明にとっていかに重大な影響を与えつつあるかは、万人のよく知るところであります。原子力の重要性はいうまでもありませんが、原子物理学は今日先進諸国においては、生物学、工学、農学、医学等に広く応用されるほか、生産技術の方面にも根本的変革をもたらしつつあり、この分野の著しい立ち遅れを克服することは、わが国が当面する重要課題の1つであります。

以上の趣旨により、今回私共は故仁科博士を記念し、原子物理学とその応用に関する研究の振興を目的として、仁科記念賞の授与、研究奨励金の交付、海外学者の招聘、研究者の海外派遣、記念文庫の設置、記念講演会の開催等の事業を行うために、広く各界からの御寄附を仰いできましたところ、国内及び海外各方面から多数の方々のお賛同をえて、ここに2000万円に達する募金をみるに至りました。「仁科記念財団」はこの寄附金と故博士の蔵書とをもって設立されるものであります。

昨今わが国においても原子力の平和的利用が声高く叫ばれておりますが、その健全なる発展は基礎科学とその応用との調和なくしてはこれを望むことはできません。この調和こそ故博士の理想とせられたところであり、本財団は必ずやその成果を挙げ、わが国科学技術の発展に寄与するのみならず、世界の原子物理学の進展に貢献せんとするものであります。

財団法人仁科記念財団寄附行為

第1章 総則

第1条 この法人は、財団法人仁科記念財団という。

第2条 この法人は、事務所を東京都文京区本駒込2丁目28番45号におく。

第2章 目的および事業

第3条 この法人は、故仁科芳雄博士のわが国および世界の学術文化に対する功績を記念して、原子物理学およびその応用を中心とする科学技術の振興と学術文化

の交流を図り、もってわが国の学術および国民生活の向上発展、ひいては世界文化の進歩に寄与することを目的とする。

第4条 この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 原子物理学およびその応用に関する研究において、きわめて優秀な成果を収めた者に対する仁科記念賞の授与
2. 原子物理学およびその応用に関する仁科記念講演会の開催
3. 原子物理学およびその応用に関する図書を蒐集公開する仁科記念文庫の経営
4. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う研究機関および個人に対する仁科記念奨励金の授与
5. 原子物理学およびその応用に関する研究を行う学者の招聘および海外派遣
6. 原子物理学およびその応用に関する知識の普及を目的とする出版物の刊行
7. その他前条の目的を達成するために必要な事業

第3章 資産および会計

第5条 この法人の資産は、次のとおりとする。

1. この法人設立の当初に仁科記念財団設立発起人会が寄附した別紙財産目録記載の財産
2. 資産から生ずる果実
3. 事業に伴う収入
4. 寄附金品
5. 賛助会費
6. その他の収入

第6条 この法人の資産を分けて基本財産および運用財産の2種とする。

基本財産は、別紙財産目録のうち基本財産の部に記載する資産および将来基本財産に編入される資産で構成する。

運用資産は、基本財産以外の資産とする。ただし、寄附金品であって寄附者の指定あるものは、その指示に従う。

第7条 この法人の基本財産のうち、現金は、理事会の議決によって確実な有価証券を購入するか、または定期郵便貯金とし、もしくは確実な信託銀行に信託する

か、または定期預金として理事長が保管する。

第8条 基本財産は、消費し、また担保に供してはならない。ただし、この法人の事業遂行上やむを得ない事由があるときは、理事会の議決を経、かつ文部科学大臣の承認を受けて、その一部に限り処分し、または担保に供することができる。

第9条 この法人の事業遂行に要する費用は、資金から生ずる果実および事業に伴う収入等運用財産をもって支弁する。

第10条 この法人の事業計画およびこれに伴う収支予算は、毎会計年度の開始前に理事長が編成し、理事会の議決を経て文部科学大臣に届け出なければならない。事業計画および収支予算を変更した場合も同様とする。

第11条 この法人の決算は、会計年度終了後、2箇月以内に理事長が作成し、財産目録、事業報告書および財産増減事由書とともに監事の意見をつけて理事会の承認を受け文部科学大臣に報告しなければならない。

この法人の決算に剰余金があるときは、理事会の議決を経て、その一部または全部を基本財産に編入し、あるいは翌年度に繰越すものとする。

第12条 収支予算で定めるものを除くほか、新たに義務の負担をし、また権利の放棄をしようとするときは、理事会の議決を経、かつ、文部科学大臣の承認を受けなければならない。借入金（その会計年度内の収入をもって償還する一時借入金を除く。）についても同様とする。

第13条 この法人の会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第4章 役員、評議員および職員

第14条 この法人には、次の役員をおく。

理事 20名以上25名以内

監事 2名以上4名以内

第15条 理事および監事は、評議員会でこれを選任し、理事は、互選で理事長1名、常務理事3名以内を定める。

第16条 理事長は、この法人の事務を総理し、この法人を代表する。

理事長に事故があるとき、または理事長が欠けたときは、理事長があらかじめ指名した常務理事が、その職務を代行する。

常務理事は、理事長を補佐し、理事会の決議に基いて日常の事務に従事する。

第17条 理事は、理事会を組織し、この法人の業務を議決し執行する。

第18条 監事は、民法第59条に定める職務を行う。

第19条 この法人の役員の任期は、2年とする。ただし、再任を妨げない。

補欠による役員の任期は、前任者の残在期間とする。

役員は、その任期満了後でも、後任者が就任するまでは、なお、その職務を行う。

役員は、この法人の役員たるにふさわしくない行為のあった場合、または、特別の事情のある場合には、その任期中でも評議員会および理事会の議決によってこれを解任することができる。

第20条 役員は、有給とすることができる。

第21条 この法人には、評議員35名以上45名以内をおく。

評議員は、理事会でこれを選出し、理事長が委嘱する。

評議員には、第19条を準用する。この場合には同条中「役員」とあるのは、「評議員」と読み替えるものとする。

第22条 評議員は、評議員会を組織し、この寄附行為に定める事項のほか、理事会の諮問に応じ、理事長に対して助言する。

第23条 この法人に顧問若干名をおくことができる。

顧問は、理事会でこれを選出し、理事長が委嘱する。

顧問の任期については第19条を準用する。この場合には、同条中「役員」とあるのは、「顧問」と読み替えるものとする。

第24条 この法人の事務を処理するために書記等の職員をおく。

職員は、理事長が任免する。

職員は、有給とする。

第5章 会議

第25条 理事会は、毎年2回理事長が召集する。ただし、理事長が必要と認めた場合、または理事現在数の3分の1以上から会議の目的事項を示して請求のあったときは、理事長は、臨時理事会を召集しなければならない。

理事会の議長は、理事長とする。

第26条 理事会は、理事現在数の3分の2以上が出席しなければ議事を開き議決することができない。ただし、当該議事について書面をもって、あらかじめ意思を表示した者は、出席者とみなす。

理事会の議事は、この寄附行為に別段の定めがある場合を除くほか、出席理事の過半数をもって決し、可否同数のときは議長が決する。

第27条 次に掲げる事項については、理事会において、あらかじめ評議員会の意見を聞かなければならない。

1. 予算および決算に関する事項

2. 不動産の買入れ、または基本財産の処分に関する事項

3. その他この法人の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めた事項

第25条および前条は、評議員会にこれを準用する。この場合には、第25条および前条中「理事会」および「理事」とあるのは、それぞれ「評議員会」および「評議員」と読み替えるものとする。

第28条 すべての会議には、議事録を作成し、議長および出席者代表2名が署名捺印した上で、これを保存しなければならない。

第6章 賛助会員

第29条 この法人に賛助会員をおく。賛助会員は、この法人の趣旨に賛同する団体、法人または個人であって別に定める規定により賛助会費を納入するものとする。

第7章 寄附行為の変更ならびに解散

第30条 この寄附行為は、理事現在数および評議員現在数のおおの3分の2以上の同意を経、かつ、文部科学大臣の認可を得なければ変更することができない。

第31条 この法人を解散するには、理事現在数および評議員現在数のおおの4分の3以上の同意を経、かつ文部科学大臣の許可を受けなければならない。

第32条 この法人の解散に伴う残余財産は、理事全員の合意を経、かつ、文部科学大臣の許可を受けて、この法人の目的に類似の目的を有する公益事業に寄附するものとする。

第8章 補則

第33条 この寄附行為の施行についての細則は、理事会の議決をもって別に定める。

付則

第34条 この法人の設立当初の理事および監事は、次のとおりである。

理事(理事長) 渋沢敬三

理事(常務理事) 朝永振一郎

理事(常務理事) 村越司

理事 石川一郎

理事 植村甲午郎

理事 亀山直人

理事 酒井杏之助

理事 瀬藤象二

理事 原安三郎

理事 藤山愛一郎

理事 我妻栄

監事 茅誠司

監事 武見太郎

監事 二見貴知雄

昭和34年6月1日 一部(事務所所在地)変更認可

昭和41年11月8日 一部(理事および評議員の定数)変更認可

平成2年7月27日 一部(評議員の定数)変更認可

平成3年7月8日 一部(賛助会費制の導入)変更認可

平成13年1月6日 一部(文部大臣)変更

役員及び評議員等名簿

(2008年4月1日現在,五十音順)

理事長	山崎 敏光						
常務理事	鈴木 増雄	中根 良平					
理事	江崎玲於奈	鹿島 昭一	小林 俊一	佐々木 元	庄山 悦彦		
	杉田 力之	伊達 宗行	田畑 米穂	西島 和彦	野村 哲也		
	野依 良治	濱田 達二	林 主税	原 禮之助	藤川 和男		
	前田勝之助	三村 明夫	山田 作衛	若井 恒雄	和達 三樹		
	渡里杉一郎						
監事	池田 長生	星野 英一					
顧問	有馬 朗人	小柴 昌俊	伏見 康治				
評議員	秋元 勇巳	荒船 次郎	飯島 澄男	市村 宗武	江口 徹		
	江澤 洋	勝又 紘一	金森順次郎	上坪 宏道	川路 紳治		
	木越 邦彦	木舟 正	古在 由秀	坂井 光夫	壽榮松宏仁		
	菅原 寛孝	杉本大一郎	鈴木 厚人	高木丈太郎	高見 道生		
	田中 靖郎	玉木 英彦	土屋 莊次	戸塚 洋二	外村 彰		
	豊沢 豊	中井 浩二	西川 哲治	仁科雄一郎	西村 純		
	林原 健	原 康夫	廣田 榮治	丸森 寿夫	宮沢 弘成		
	宮本 健郎	茂木友三郎	安岡 弘志	芳田 奎	吉田庄一郎		
	和田 昭允						
運営委員	荒船 次郎	池田 長生	江口 徹	江澤 洋	梶田 隆章		
	西島 和彦	仁科雄一郎	西村 純	藤川 和男	宮沢 弘成		
	矢野 安重	山田 作衛	和達 三樹				
選考委員	鈴木 増雄	(委員長) 他21名					

付 録

仁科記念賞受賞者とその業績

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1955	大阪大学理学部 緒方 惟一 大阪市立大学 西島 和彦 理学部	大型質量分析器の完成 素粒子相互変換
1956	大阪大学理学部 芳田 奎 東京大学農学部 三井 進午 農業技術研究所 西垣 晋 〃 江川 友治 蚕糸試験場 潮田 常三	反強磁性体における磁気異方性エネルギー 同位元素による植物の栄養ならびに土壤肥料学的研究
1957	東京大学理学部 久保 亮五	非可逆過程の統計力学
1958	大阪大学理学部 杉本 健三 東京教育大学 沢田 克郎 理学部	原子核の励起状態の磁気能率、および電気四極子能率の測定 電子ガスの相関エネルギーに関する研究
1959	ソニー(株) 江崎玲於奈 理化学研究所 中根 良平	エサキダイオードの発明、およびその機能の理論的解明 化学交換反応による同位元素濃縮
1960	大阪府立大学 吉森 昭夫 理学部	磁性結晶におけるスピンのらせん状配列の理論
1961	東京大学 丹生 潔 原子核研究所 名古屋大学 福井 崇時 理学部 大阪市立大学 宮本 重徳 理学部 京都大学理学部 松原 武生	中間子多重発生の火の玉模型 デイスチャージチェンバーの研究と開発 量子統計力学の方法
1962	名古屋大学 高山 一男 プラズマ研究所 工業技術院 佐々木 亘 電気試験所	低密度プラズマの研究——特に共鳴探針法の発明 ゲルマニウムの熱い電子の異方性の研究
1963	京都大学理学部 林 忠四郎	天体核現象の研究

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1964	東京大学理学部 岩田 義一	静電磁場における電子, およびイオンの運動に関する研究
	東京教育大学 瀬谷 正男 光学研究所	真空分光計に関する研究
1965	京都大学教養部 三谷 健次 名古屋大学 田中 茂利 プラズマ研究所	弱電離プラズマのサイクロトロン周波数における負吸収の研究
	大阪市立大学 三宅 三郎 理学部	宇宙線ミュー中間子およびニュートリノの研究
1966	東京大学 小田 稔 宇宙航空研究所	SCO-X-1 の位置決定
	東京大学 豊沢 豊 物性研究所	固体光物性の動力学的理論
1967	広島大学理学部 小川 修三 東京大学 山口 嘉夫 原子核研究所	基本粒子の対称性に関する研究
	東京大学 西村 純 宇宙航空研究所	超高エネルギー相互作用における横向き運動量の研究
1968	九州大学理学部 森 肇	非平衡状態の統計力学
	工業技術院 近藤 淳 電気試験所	希薄合金の抵抗極小の解明
1969	大阪大学教養部 松田 久	原子質量精密測定用大分散質量分析装置の開発
	名古屋大学 池地 弘行 プラズマ研究所	イオン波エコーの研究
1970	京都大学理学部 西川 恭治	
	学習院大学 木越 邦彦 理学部	炭素-14 による年代測定に関する研究
1971	東京大学理学部 西川 哲治	線型加速器に関する基礎研究
	東京大学 菅原 寛孝 原子核研究所	基本粒子の対称性の応用
	ミュンヘン工科大学 森永 晴彦	インビームスペクトロスコープの創出と原子核構造の研究

年 度	受 賞 者		受 賞 者 業 績
1972	テンブル大学 物理学科	川崎 恭治	臨界現象の動力学的理論
	東北大学理学部	真木 和美	超伝導体の理論的研究
1973	京都大学 数理解析研究所	中西 襄	場の量子論における散乱振幅の諸性質の分析
	京都大学基礎物 理学研究所	佐藤 文隆	重力場方程式の新しい厳密解の発見とそれの宇 宙物理学への応用
	広島大学理論物 理学研究所	富松 彰	
1974	大阪大学教養部	大塚 穎三	半導体電子輸送現象のサイクロトロン共鳴によ る研究
	ニューヨーク市 立大学	崎田 文二	素粒子の超多重項理論および二重性理論の研究
1975	東京大学理学部	山崎 敏光	核磁気能率における中間子効果の発見
	東京大学 物性研究所	花村 榮一	多励起子系の理論的研究
1976	九州大学理学部	磯矢 彰	静電高圧加速器の研究とその新機軸の開発
	ロチェスター大 学理学部	大久保 進	強い相互作用による素粒子反応に対する選択規 則の発見
	名古屋大学 理学部	飯塚重五郎	
1977	東京大学 物性研究所	塩谷 繁雄	ピコ秒分光法による半導体の高密度励起効果の 研究
	京都大学基礎物 理学研究所	牧 二郎	素粒子の四元模型
	筑波大学 物理学系	原 康夫	
1978	分子科学研究所	廣田 榮治	高分解能高感度分光法によるフリーラディカル の研究
	東京大学理学部	有馬 朗人	原子核の集団運動現象の解明
	東京大学 原子核研究所	丸森 寿夫	

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1979	東京大学 物性研究所	守谷 亨 遍歴電子強磁性の理論
	高エネルギー物 理学研究所	小林 誠 基本粒子の模型に関する研究
	東京大学 原子核研究所	益川 敏英
1980	大阪大学理学部	伊達 宗行 超強磁場の発生
	東北大学原子核 理学研究施設	鳥塚 賀治 原子核の巨大共鳴の研究
	京都大学理学部 プリンストン高 級研究所	九後汰一郎 小嶋 泉 非可換ゲージ場の共変的量子化の理論
1981	東京大学 教養学部	杉本大一郎 近接連星系の星の進化
	高エネルギー物 理学研究所	吉村 太彦 宇宙のバリオン数の起源
1982	筑波大学 物理工学系	安藤 恒也 MOS 反転層における二次元電子系の理論的研究
	(株)日立製作所 中央研究所	外村 彰 電子線ホログラフィー法の開発とその応用
1983	フェルミ国立加 速器研究所	山内 泰二 ウプシロン粒子の発見に対する貢献
	東京大学理学部	増田 彰正 希土類元素の微量精密測定と宇宙・地球科学への応用
1984	東京大学理学部 コーネル大学	江口 徹 川合 光 格子ゲージ理論
	東北大学理学部	石川 義和 中性子散乱による金属強磁性の研究
	学習院大学 理学部	川路 紳治 二次元電子系における負磁気抵抗および量子ホール効果の実験的研究
1985	マサチューセッ ツ工科大学	田中 豊一 ゲルの相転移現象の研究
	新技術開発事業 団	飯島 澄男 少数原子集団の動的観察
	宇宙科学研究所	田中 靖郎 てんま衛星による中性子星の研究

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1986	東京大学理学部 鈴木 増雄	相転移秩序形成及び量子多体系の統計物理学
	広島大学理論物理学研究所 藤川 和男	場の量子論における異常項の研究
	広島大学核融合理論研究センター 佐藤 哲也	散逸性磁気流体プラズマの非線形ダイナミックス
1987	東京工業大学 高柳 邦夫	シリコンの表面構造の研究
	東京大学 森本 雅樹	ミリ波天文学の開拓
	東京天文台 海部 宣男	
	東海大学理学部 小柴 昌俊	超新星爆発に伴うニュートリノの検出
	東京大学理学部 戸塚 洋二	
	素粒子物理国際センター 須田 英博	
1988	東京大学 宇宙線研究所	
	名古屋大学 理学部 松本 敏雄	宇宙背景輻射のサブミリ波スペクトルの観測
	大阪大学理学部 吉川 圭二	ひもの場の理論
1989	東京大学 物性研究所 齋藤 軍治	有機超伝導体の新しい分子設計と合成
	理化学研究所 谷畑 勇夫	不安定原子核ビームによる原子核の研究
	東京大学理学部 野本 憲一	超新星の理論的研究
1990	東京大学理学部 佐藤 勝彦	素粒子論的宇宙論
	東京大学理学部 十倉 好紀	電子型銅酸化物超伝導体の発見
	高エネルギー物理学研究所 横谷 馨	リニアコライダーにおけるビーム相互作用の研究
1991	高エネルギー物理学研究所 北村 英男	挿入型放射光源の開発研究
	分子科学研究所 齋藤 修二	星間分子の分光学的研究
	東京大学理学部 和達 三樹	ソリトン物理学とその応用

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1992	NTT 基礎研究所 山本 喜久	光子数スクイーズ状態の形成および自然放射の制御
	筑波大学 物質工学系 大貫 惇睦	遍歴する重い電子系のフェルミ面に関する研究
	新潟大学教養部 長谷川 彰	
	東北大学理学部 柳田 勉	ニュートリノ質量におけるシーソー機構
1993	核融合科学研究所 伊藤 公孝	高温プラズマにおける異常輸送とL-H 遷移の理論
	九州大学 応用力学研究所 伊藤 早苗	
	理化学研究所 勝又 紘一	新しい型の磁気相転移の研究
1994	学習院大学 理学部 川畑 有郷	アンダーソン局在およびメソスコピック系における量子輸送現象の理論
	東京大学 原子核研究所 田辺 徹美	クーラーリングを用いた電子・分子イオン衝突の精密研究
	筑波大学 物理学系 岩崎 洋一	格子量子色力学の大規模数値シミュレーションによる研究
	筑波大学 物理学系 宇川 彰	
	高エネルギー物理工学研究所 大川 正典	
	京都大学基礎物理工学研究所 福来 正孝	
1995	東北大学大学院 理学研究科 佐藤 武郎	超低温における量子的相分離現象の実験的研究
	大阪大学大学院 工学研究科 川上 則雄	共形場理論に基づく1次元電子系の研究
	筑波大学 物理学系 梁 成吉	

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
1996	日亜化学工業(株) 開発部 中村 修二	短波長半導体レーザーの研究
	東北大学工学部 板谷 謹悟	固液界面でのアトムプロセスの解明に関する研究
	国立天文台 電波天文系 中井 直正	銀河中心巨大ブラックホールの発見
	国立天文台 電波天文系 井上 允	
	国立天文台 地球回転研究系 三好 真	
1997	東京大学 宇宙線研究所 木舟 正	超高エネルギーガンマー線天体の研究
	東京工業大学 理学系研究科 谷森 達	
	名古屋大学理学部 三田 一郎	B 中間子系での CP 対称性の破れの理論
	東京大学物性研究所 安岡 弘志	高温超伝導体におけるスピングャップの発見
1998	青山学院大学 理工学部 秋光 純	梯子型物質における超伝導の発見
	電気通信大学レーザー極限技術研究センター 清水富士夫	原子波ホログラフィーの開拓
	筑波大学物理学系 近藤 都登	トップクォーク発見に対する貢献
1999	九州大学理学部 井上 研三	超対称標準理論における電弱対称性の量子的破れ
	近畿大学九州工学部 角藤 亮	
	東京大学宇宙線研究所 梶田 隆章	大気ニュートリノ異常の発見
	日本電気(株)基礎研究所 中村 泰信	超伝導素子を用いたコヒーレント 2 準位系の観測と制御

年 度	受 賞 者	受 賞 者 業 績
2000	東京大学大学院 理学系研究科	宇宙線反陽子の観測
	高エネルギー加 速器研究機構低 温工学センター	
	イタリア Pisa 大学	小西アノマリーの発見
	京都大学大学院 理学研究科	フェルミ粒子分子動力学による原子核の研究
2001	東京大学宇宙線 研究所	太陽ニュートリノの精密観測によるニュートリ ノ振動の発見
	東京大学宇宙線 研究所	
	高エネルギー加速 器研究機構	B 中間子における CP 対称性の破れの発見
	高エネルギー加速 器研究機構	
	大阪大学基礎工 学部	超高圧下における酸素及び鉄の超伝導の発見
	大阪大学基礎工 学部	
2002	京都大学大学院 理学研究科	超新星残骸での宇宙線加速
	東京大学大学院 理学系研究科	人工原子・分子の実現
	大阪大学核物理 研究センター	原子核による速中性子捕獲現象の研究
	東京工業大学原 子炉工学研究所	
2003	大阪大学大学院 基礎工学研究科	核磁気共鳴法による新しい超伝導状態の解明

年 度	受 賞 者		受 賞 者 業 績
2003	東北大学大学院 理学研究科	鈴木 厚人	原子炉反電子ニュートリノの消滅の観測
	大阪大学核物理 研究センター	中野 貴志	レーザー電子ガンマ線による新粒子の発見
2004	理化学研究所・ 日本電気株式会社	蔡 兆申	ジョセフソン接合素子を用いた2個の量子ビット間の量子もつれ状態の実現
	名古屋大学大学 院理学研究科	丹羽 公雄	原子核乾板全自動走査機によるタウニュートリノの発見
2005	東京大学大学院 工学系研究科	永長 直人	異常ホール効果の理論的研究
	京都大学大学院 理学研究科	西川公一郎	加速器ビームによる長基線ニュートリノ振動の観測
	理化学研究所先 任研究員	森田 浩介	新超重113番元素の合成
2006	日本原子力研究 開発機構関西光 科学研究所	田島 俊樹	レーザーを用いたプラズマ電子加速の先駆的研究
	東京工業大学大学 院理工学研究科	西森 秀稔	ランダムスピン系における「西森線」の発見
	物質・材料研究機 構ナノ物質ラボ	三島 修	水・非晶質水の相転移・ポリアモルフィズムの実験的研究
2007	大阪大学大学院 理学研究科	細谷 裕	細谷機構の発見

(受賞者の所属は受賞時のもの)

海外派遣研究者

年度	派 遣 者	研 究 目 的	派 遣 先
1956	小林理学研究所 森田 正人	原子核理論, 素粒子論の研究	アメリカ
	東京大学 松浦 二郎 教養学部	超ウラン元素の化学的研究	フランス
1957	東京大学 小出昭一郎 教養学部	結晶内における遷移金属イオンの諸性質の理論的研究	イギリス
	東京大学農学部 麻生 末雄	ラジオアイソトープの農学分野における利用	アメリカ
1958	立教大学理学部 伊藤 隆	生物体におよぼす放射線の影響	アメリカ
1959	東京大学大学院 真隅 泰三 数物系研究科	固体電子工学の基礎物理的研究	アメリカ
	東京大学 磯矢 彰 原子核研究所	サイクロトロンによる核反応の研究	アメリカ
1960	東京教育大学 池田 長生 理学部	放射化学, 分析化学に関する新しい知見, 技術の研究	ド イ ツ
	理化学研究所 佐田登志夫	機械工業における RI の利用	アメリカ
	東京大学 菅 浩一 原子核研究所	空気シャワーの研究	アメリカ
1961	東洋紡績(株) 上田 寿 技術研究所	放射線の固体高分子化合物中に生じたラジカルの電子スピン共鳴吸収による研究	アメリカ
	北海道大学 渡辺 宏 理学部	結晶内 ions を marker として local な性質を調べる	イギリス
1962	大阪大学理学部 近藤 道也	加速器, ことに A.V.F. サイクロトロンの研究	アメリカ
	電電公社 新井 敏弘 電気通信研究所	磁界中における半導体の光学的諸性質の研究	イギリス
1963	東京大学応用微生物研究所 金井 竜二	同位元素を用いた光合成機作の研究	ド イ ツ
1964	東京都立大学 金子洋三郎 理学部	原子衝突の実験に関する研究	イギリス

年 度	派 遣 者	研 究 目 的	派 遣 先
1965	ソニー(株)研究所 森垣 和夫	半導体内の電子状態の研究	フランス
1966	大阪大学理学部 溝淵 明	Van de Graaff 型加速装置を用いた 原子核反応による核構造の研究	アメリカ
	東京大学大学院 理学系研究科 香村 俊武	素粒子の原子核反応, 重粒子間の相 互作用の研究	イギリス
1967	京都大学理学部 牟田 泰三	場の理論における複合粒子の条件	イギリス
	東京大学 原子核研究所 黒田 育子	原子核(中重核)の多体問題的方法, およびその構造について研究	デンマーク
1968	東京大学理学部 池田 清美	原子核構造の種々の側面の理論的追 求	ソ連, デ ンマーク
1969	東京大学理学部 山崎 昶	核磁気共鳴とその応用	ド イ ツ
1970	東京大学 教養学部 林 憲二	素粒子論ハドロンの表現	ド イ ツ
	東京大学 原子核研究所 永野 元彦	(1)水平シャワーの観測と解釈 (2)空気シャワーの芯の研究	ド イ ツ
1971	東京大学 原子核研究所 石原 正泰	インビーム γ 線を用いた原子核構造, 核反応の研究	スウェー デン
	東京大学 物性研究所 栗田 進	イオン結晶の遠赤外レーザーによる サイクロトロン共鳴, および帯間磁 気光吸収の精密な測定により励起子 および電子のポーラロン効果を研究	アメリカ
1972	東京工業大学 理学部 八田 一郎	誘電体の相転移の動的機構	イギリス
	東京都立大学 理学部 広瀬 立成	反核子偏極の測定及び $\bar{p}p$ 消滅にお ける多重発生の研究	ド イ ツ
1973	東京大学理学部 永宮 正治	原子核の励起状態の電磁氣的性質の 研究, および核スピンの物質中での 超微細相互作用の研究	アメリカ
	東京大学工学部 海老沢丕道	(1)第二種超伝導体の輸送現象 (2)量子液体の磁氣的性質の研究	アメリカ
1974	東京大学理学部 高木 伸	液体ヘリウム 3 の異常相の理論的研 究	イギリス

年 度	派 遣 者	研 究 目 的	派 遣 先
1974	大阪大学教養部 大山 忠司	高密度励起子系における凝縮相の安定性とバンド構造の関係の研究	アメリカ
1975	東北大学 黒田 規敬	層状半導体における非線形磁気光学効果の研究	アメリカ
	金属材料研究所 仲伏 廣光	二段二重収束質量分析装置による原子質量の精密測定－原子質量の精密測定用 RF 質量分析計の再建作業、およびこれによる原子質量測定の研究	オランダ
1976	東北大学理学部 新村 信雄	TOF 中性子回折法による過渡現象の研究	デンマーク
	京都大学理学部 松柳 研一	中重核における集団励起モードの微視的理論の研究	デンマーク
1977	京都大学基礎物 山脇 幸一	光的量子化の特徴である波動関数を用いてハドロン共鳴の分類の研究	アメリカ
	理学研究所 片山 信一	IV－VI族化合物半導体の構造相転移の研究	アメリカ
	大阪大学理学部		
	京都大学基礎物 氷上 忍	相転移と臨界現象を理論的に研究	アメリカ
	理学研究所		
1978	筑波大学 外山 学	原子核反応の機構についての研究	アメリカ
	物理学系		
	東京大学理学部 小野 義正	超流動 ^3He の輸送現象の研究	アメリカ
	東京大学 倉又 秀一	原子核乾板と他の測定器の複合装置を用いて行なわれるニュートリノ反応による新素粒子研究実験への参加	アメリカ
	宇宙線研究所		
1979	大阪大学工学部 田口 常正	II－VI半導体の格子欠陥の生成、消滅機構の研究	イギリス
	岡山大学工学部 東辻 浩夫	高密度プラズマの理論	アメリカ
1980	横浜国立大学 佐々木 賢	ノンレプトニック崩壊などの諸現象を量子色力学を用いて研究	アメリカ
	教育学部		
	早稲田大学理工 玉田 雅宣	宇宙線を用いた超高エネルギー核衝突による新しい型の核相互作用の研究	ソビエト
	学研究所学生		

年 度	派 遣 者	研 究 目 的	派 遣 先
1980	新潟大学理学部 鈴木 宜之	軽い核におけるクラスター構造と高励起エネルギーでの分子的共鳴	アメリカ
1981	東京都立大学理学部 遠藤 和豊	同時計数メスバウア分光法により、壊変によって生じる不安定な化学種の時間的推移をしらべる研究	ドイツ
	名古屋大学理学部 三宅 和正	超流動の物理の理論的研究	イギリス
1982	東京大学大学院理学系研究科 手嶋 久三	anomalous Ward identity における発散の処理の再検討及び dynamical Higgs mechanism の模型と100GeV領域の現象への反映	アメリカ
	大阪大学理学部 城 健男	磁気体積効果等の物性の研究及び photoemission の実験で得られている動的な現象の理論的研究	イギリス
1983	北海道大学工学部 住吉 孝	放射線化学初期過程の研究にピコ秒の時間分解能を有する電気伝導法を用い、従来からの種々の高速分光法とあわせて詳細な解明をおこなう	西ドイツ
1984	立教大学理学部 鈴木 昌世	電離放射線励起及び光励起に基づく希ガス・シンチレーション（混合系、凝縮層を含む）に関する実験的研究	スイス
	東京大学理学部 梁 成吉	格子量子色力学，クォーク・グルオンの力学系の非摂動的構造の解明	デンマーク
1985	京都大学理学部 清水 良文	高スピン状態における原子核の分光学的研究	デンマーク
1986	大阪大学教養部 川村 光	相転移現象の統計力学的研究	アメリカ
	理化学研究所 神原 正	加速器を用いた原子衝突過程の実験	西ドイツ
1987	東京大学教養学部 原 隆	構成的場の理論及び厳密統計力学	アメリカ
	東京大学大型計算機センター 吉永 尚孝	16 重極の自由度と相互作用するボソン模型	イギリス
	琉球大学理学部 中里 弘道	確率過程量子化法とその応用	デンマーク

年 度	派 遣 者	研 究 目 的	派 遣 先	
1988	東京大学 教養学部	錦織 紳一	金属錯体をホストとする包接化合物 の化学	カ ナ ダ
	東京大学理学部	松尾 泰	ひも理論の幾何学的量子化	アメリカ
1989	京都大学基礎物 理学研究所	武末 真二	可逆セルオートマトンの熱力学的振 舞	アメリカ
	京都大学教養部	小林健一郎	Conformal Field Theory と String のコンパクト化	アメリカ
1990	東北大学理学部	高木 滋	希土類及びウランの化合物での重い 電子系の物性研究	ス イ ス
	東京大学 物性研究所	福山 寛	超低温・高磁場下での固体 ³ He の核 磁性	アメリカ
	慶應義塾大学 理工学部	高野 宏	ランダム・スピン系における緩和現 象の統計力学的研究	イギリス
	高エネルギー物 理学研究所	石橋 延幸	二次元の場の量子論と弦理論	アメリカ
1991	京都大学基礎物 理学研究所	松尾 正之	原子核における大振幅集団運動の理 論的研究	デンマーク
	新潟大学理学部	矢花 一浩	原子核理論	アメリカ
	大阪大学教養部	小堀 裕己	物性実験	アメリカ
	京都大学基礎物 理学研究所	菅野 浩明	重力理論	イギリス
1992	東京大学 教養学部	松田 祐司	高温超伝導実験	アメリカ
	高エネルギー物 理学研究所	野尻美保子	素粒子理論	アメリカ
	理化学研究所	小島 隆夫	低エネルギーイオン分子反応実験	アメリカ
1993	広島大学理学部 物理学科	大野木哲也	素粒子論	アメリカ
	広島大学理学部 物性学科	森 弘之	物性理論	アメリカ
	順天堂大学医学 部物理研究室	中田 仁	原子核理論	アメリカ

年 度	派 遣 者	研 究 目 的	派 遣 先	
1993	学習院大学 理学部化学科	加藤 隆二	放射線化学	ド イ ツ
1994	東京大学理学部	立川 真樹	赤外ガスレーザーにおけるレーザー不安定の発生機構	アメリカ
	東北大学 科学計測研究所	松井 広志	極低温におけるヘビーフェルミオンの音響的ドハース-ファンアルフェン効果	イギリス
	東京大学 原子核研究所	綿引 芳之	ゲージ理論および格子理論による重力の量子化	デンマーク
1995	東京大学理学部	羽田野直道	量子多体系の基底状態相転移	アメリカ
	横浜国立大学 工学部	武田 淳	一次元絶縁体の光誘起欠陥状態に関する分光学的研究, 有機フォトリミックス化合物の光誘起相転移現象の研究	アメリカ
	茨城大学 理学部	西森 拓	砂地形の非線形動力学	デンマーク
1996	高エネルギー研究所	磯 暁	場の量子論と物性物理への応用	アメリカ
	ルイ・パスツール大学	小田 玲子	荷電棒状ミセルの構造とその相転移	フランス
1997	N.B.I. 日本学術 振興会海外特別 研究員	佐藤 晴正	世界線形式に基づいた Bern-Kosower 規則の研究	ド イ ツ
	N.B.I. 日本学術 振興会海外特別 研究員	西垣 真祐	量子力学のカイラル対称性の破れのランダム行列理論による記述	アメリカ
1998	高知大学理学部	津江 保彦	ハドロンの物質の相転移のダイナミックス	フランス
1999	早稲田大学 D 3 (学振)	長岡 克巳	超伝導針を STM 探針に用いた超伝導体表面の電子状態の観測	アメリカ
2000	京都大学基礎物 理学研究所	阪口 真	Brane の幾何学的定式化	イギリス

年 度	派 遣 者	研 究 目 的	派 遣 先
2000	東京工業大学 D 3 大友 明	ZnO 量子構造	アメリカ
2001	東京大学工学部 守田 佳史	二次元量子系における乱れに起因する臨界現象	アメリカ
	学習院大学理学部 矢野 陽子	液体表面の構造	アメリカ
2002	名古屋大学 D 3 住 貴宏	重力マイクロレンズを用いた銀河暗黒物質、銀河構造及び系外惑星の研究	アメリカ
	CERN 理論部研究員 西村まどか	超弦理論における双対性の超重力理論による研究	アメリカ
	姫路工業大学理学部 長谷川太郎	イオントラップ中の冷却イオンと希ガス間のスピン移行の研究	アメリカ
2003	理化学研究所 協力研究員 中村 真	三次元イジングモデルを記述する弦理論	デンマーク
2004	日本学術振興会 特別研究員 PD 渡辺元太郎	高密度天体内部における非球状核の物質科学	デンマーク
	東京大学 D 3 酒井 一博	代数幾何的背景構造を持つ弦理論の非摂動論研究	フランス
2005	科学技術振興機構 プロジェクト研究員 小野瀬佳文	遍歴強磁性体における異常ホール効果の研究	アメリカ
	日本学術振興会 特定国派遣研究員 道下 洋二	時間依存性のある背景、弦の場の理論と D-ブレーンの力学	アメリカ
2006	東京大学大学院理学系研究科 柳瀬 陽一	○スピン三重項超伝導の微視的理論 ○強相関電子系における磁性と超伝導の多重臨界現象	スイス
	名古屋大学大学院多元数理科学研究科 森山 翔文	超弦理論における AdS/CFT 対応	アメリカ

年 度	派 遣 者		研 究 目 的	派 遣 先
2007	理化学研究所基礎 科学特別研究員	浅川 嗣彦	弦理論と D-brane の非可換幾何学 的構造に基づいた新しい定式化	デンマーク
	理化学研究所協 力研究員	深谷 英則	厳密なカイラル対称性を保つ Dirac 演算子を用いた格子 QCD シミュレ ーションの実現	デンマーク

(派遣者の所属は派遣時のもの)

途上国若手招聘研究者

滞在年度	招聘された研究者	研究題目	研究場所 受け入れ担当
1992	ベトナム原子力研究所 理論計算機物理部長 Vo Hong Anh	プラズマ中の非 線形波動と不安 定性の理論	国立核融合研究所 市川芳彦教授
	ベトナム・ホーチミン市大学 理論物理教室教授 Duong Van Phi	素粒子論	東京大学理学部, 原子核研究 所, 高エネルギー研 神奈川大学理学部 宮沢弘成教授
	ポーランド・ミツキエビツチ 大学物理学科上級助講師 Adam Lipowsky	統計物理	東京大学理学部 鈴木増雄教授
1993	ベトナム・ハノイ理論物理研 究所研究員 Hoang Ngoc Long	電磁場における 重力子の光子へ の変換	高エネルギー物理学研究所 湯川哲之教授
	ベトナム・ハノイ理論物理研 究所教授 Nguyen Ai Viet	固体物理理論 Metallic carbon nanotube にお ける格子不安定 性	東京大学物性研究所 安藤恒也教授
	中国・厦門大学物理学科講師 Lin Ting Ting	素粒子論 CP violation and B-physics	高エネルギー物理学研究所 小林誠教授
1994	ベトナム原子力研究所核科学 技術研究所理論計算機物理部 原子核理論主任研究員 Nguyen Dinh Dang	原子核理論	東京大学原子核研究所 赤石義紀教授
	中国・清華大学物理学科 助教授 王青	素粒子論, 中性 K メソン物理, CPT の破れ, ゲ ージ理論	名古屋大学理学部 三田一郎教授
	スロバキア科学アカデミー 物理研究所研究員 Miroslav Kolesik	統計物理	東京大学理学部 鈴木増雄教授

滞在年度	招聘された研究者	研究題目	研究場所 受け入れ担当
1994	中国・復旦大学物理研究所 研究員 胡長武	C ₆₀	東北大学金属材料研究所 粕谷厚生助教授
1995	ベトナム・フエ大学物理学科 講師 Nguyen Trung Dan	表面物理	東京大学工学部 花村榮一教授
1996	ベトナム・ホーチミン市大学 理論物理教室講師 Truong Ba Ha ベトナム・ハノイ大学講師 Fam Le Kien	結晶物理, 物性 理論 量子光学理論	早稲田大学理工学部 大槻義彦教授 電気通信大学レーザー極限技 術研究センター 清水和子助教授
1997	中国科学院研究生院物理部 副教授 蘇 剛 ベトナム原子力研究所 理論物理部 Nguyen Hong Son	統計物理 物性理論	東京理科大学理学部 鈴木増雄教授 東京大学物性研究所 安藤恒也教授
1998	ベトナム国立自然科学・工学 センター Le Hong Khiem ベトナム国立自然科学・工学 センター Ho Trung Dung	不安定原子核の 反応 超放射レーザー に関する研究	理化学研究所 リニアック研 谷畑勇夫主任研究員 電気通信大学 氏原紀公雄教授
1999	ベトナム国立自然科学・工学 センター Nguyen Quang Hong ベトナム・ハノイ・物理学研究所 Nguyen Anh Ky	量子ドット励起 子の荷電効果 素粒子標準理論 と331模型	電気通信大学 名取晃子教授 中央大学理工学部 稲見武夫教授

滞在年度	招聘された研究者	研究題目	研究場所 受け入れ担当
2000	ベトナム・フエ市科学技術環境局 Le Viet Dung	素粒子物理学	高エネルギー加速器研究機構 素粒子原子核研究所 清水韶光教授
2001	グルジア・トビリシ・ラジマゼ数学研究所 G. Tsitsishvili	素粒子論	東北大学理学部 江沢潤一教授
	ベトナム・ホーチミン市物理研究所 Cao Huy Thien	物性理論	東京大学物性研究所 安藤恒也教授
2002	ベトナム・ハノイ教育大学 Dang Van Soa	素粒子論	中央大学理工学部 稲見武夫教授
	台湾・ニューヨーク州立大学 院生 Shu-Chiuan Chang	統計力学	東京理科大学理学部 鈴木増雄教授
	グルジア・ラズマゼ数学研究所 Zakaria Giunashvili	量子情報理論	横浜市立大学理学部 藤井一幸教授
2004	ベトナム・核科学技術研究所 Nguyen Tuan Anh	ボーズ凝縮	東京大学大学院理学研究科 初田哲男教授
2006	エジプト・Physics Department, Faculty of Science-Damietta, Mansoura University Wael Farouk Hamed El-Taibany	プラズマ物理	東京大学大学院理学系研究科 和達三樹教授
	Department of Physics, Texas A&M University Vuong Kim Au	核物質の物理	理化学研究所 Nguyen Dinh Dang 研究員

滞在年度	招聘された研究者	研究題目	研究場所 受け入れ担当
2007	ベトナム・ハノイ・物理学研 究所 Phung Van Dong	素 粒 子 模 型 Economical 3-3 -1model の追求 とその応用	高エネルギー加速器研究機構 素粒子原子核研究所 岡田安弘教授
	ベトナム・ハノイ・物理学研 究所 Ngo Van Thanh	Condensed Ma- tter PhysicsBio- physics	東京工業大学大学院理工学研 究科 安藤恒也教授

(招聘研究者の所属は招聘時のもの)

賛助会員一覧 (1992～2007年度の法人会員，五十音順)

株式会社アルバック

科研製薬株式会社

鹿島建設株式会社技術研究所

関西電力株式会社

キッコーマン株式会社

キヤノン株式会社

国際電信電話株式会社

新日本製鐵株式会社

住友化学株式会社

住友電気工業株式会社

セイコーインスツルメンツ株式会社

中部電力株式会社

東京電力株式会社

日本電気株式会社

社団法人林原共済会

株式会社富士銀行

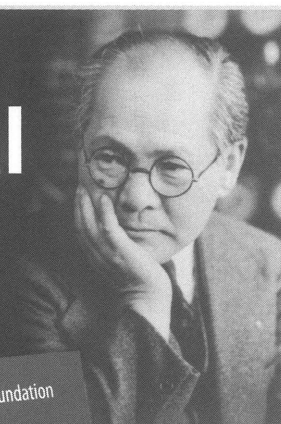
財団法人本田財団

三菱マテリアル株式会社

LECTURE NOTES IN PHYSICS VOL.746

Nishina Memorial Lectures

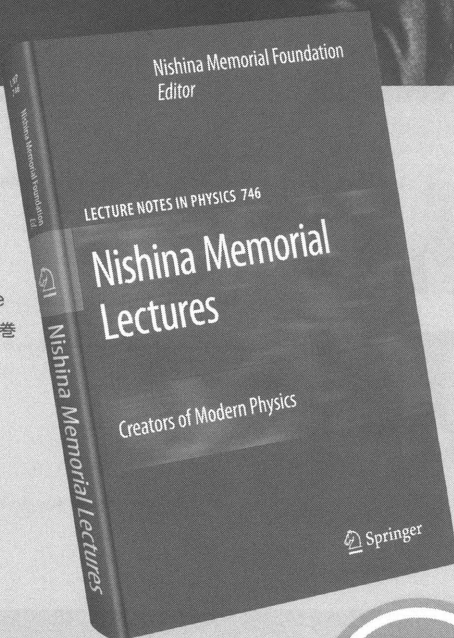
Creators of Modern Physics



50年を超える歴史と伝統に輝く
仁科記念講演会(1955年発足)で
行われた英語による講演のうち、
ハイゼンベルクの原稿をはじめとする
18篇が、このたび Springer Lecture
Notes in Physics シリーズの第 746 巻
として世界的に出版されます。

2007年12月中旬出版予定

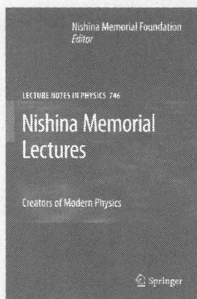
▶上製 402頁 本体9,000円+税
ISBN978-4-431-77055-8



**NEW IN
2008**

お問合せは シュプリンガー・ジャパン株式会社

▶ Write: 〒102-0073 東京都千代田区九段北1-11-11 第2フナトビル ▶ Call: 03-6831-7005 ▶ Fax: 03-6831-7006 ▶ Email: orders@springer.jp ▶ Web: www.springer.jp
Springer Japan KK, No.2 Funato Bldg, 1-11-11 Kudan-Kita, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0073, Japan



ノイゼンベルクの講演会直前の行列(本書p.154より)

ノイゼンベルク
(本書p.14より)久保亮五
(本書p.174より)シュウィンガー
(本書p.27より)フアイマン
(本書p.99より)

LECTURE NOTES IN PHYSICS VOL.746

Nishina Memorial Lectures

Creators of Modern Physics

英語原文では未発表であったハイゼンベルクの講演を1967年録音のテープから世界で初めて文字にした名文"Abstraction in Modern Science"をはじめ、フアイマン、久保亮五、シュウィンガーなど16名

の録々たる物理学者(うちノーベル賞受賞者9名)の講演が収録されています。仁科記念財団で大切に保管されてきた全講演者の顔写真や当時の講演風景などの貴重な写真も数多く掲載されています。

1 Abstraction in Modern Science 現代科学における抽象化
Werner Karl Heisenberg

2 Yoshio Nishina, the Pioneer of Modern Physics in Japan
仁科秀雄 - 日本現代物理学の先駆者
Ryogo Kubo

3 Tomonaga Sin-Itiro: A Memorial - Two Shakers of Physics
朝永振一郎の回想: 物理学における2人の立役者(源)
Julian Schwinger

4 The Discovery of the Parity Violation in Weak Interactions
and Its Recent Developments
弱相互作用下におけるパリティの破れの発見と近年の展開
Chien-Shiung Wu

5 Origins of Life 生命の起源
Freeman J. Dyson

6 The Computing Machines in the Future 未来の計算機械
Richard P. Feynman

7 Niels Bohr and the Development of Concepts
in Nuclear Physics
ニールス・ボーアと核物理学上の概念の発展
Ben R. Mottelson

8 From X-Ray to Electron Spectroscopy X線から電子分光へ
Kai Siegbahn

9 Theoretical Paradigms for the Sciences of Complexity
複雑系科学のための理論的枠組み
Philip W. Anderson

10 Some Ideas on the Aesthetics of Science
科学の美にまつわるいくつかのアイデア
Philip W. Anderson

11 Particle Physics and Cosmology:
New Aspects of an Old Relationship
素粒子物理学と宇宙論: 古い関係の新しい側面
Leon Van Hove

12 The Experimental Discovery of CP Violation
CP対称性の破れの実験的発見
James W. Cronin

13 The Nanometer Age: Challenge and Change
ナノメートル時代: 挑戦と変化
Heinrich Rohrer

14 From Rice to Snow 米から雪まで
Pierre-Gilles de Gennes

15 SCIENCE - A Round Peg in a Square World
科学 - 四角い世界に丸い釘
Harold Kroto

16 Are We Really Made of Quarks?
我々は本当にクォークからできているのか?
Jerome I. Friedman

17 Very Elementary Particle Physics
素粒子物理学 初歩の初歩
Martinus J.G. Veltman

18 The Klein-Nishina Formula & Quantum Electrodynamics
クライン - 仁科の公式と量子電磁気学
Chen Ning Yang

2007年12月中旬出版予定

▶上製 402頁 本体9,000円+税 ISBN978-4-431-77055-8

NEW IN
2008

LDN0711

好評発売中

現代物理学の創造

仁科記念講演録集
仁科記念財団 編

収録者

第1巻 朝永振一郎・鳩山道夫・湯川秀樹(ほか)

第2巻 ハイゼンベルク・朝永振一郎・湯川秀樹(ほか)

第3巻 伊達宗行・南部陽一郎・西島和彦(ほか)

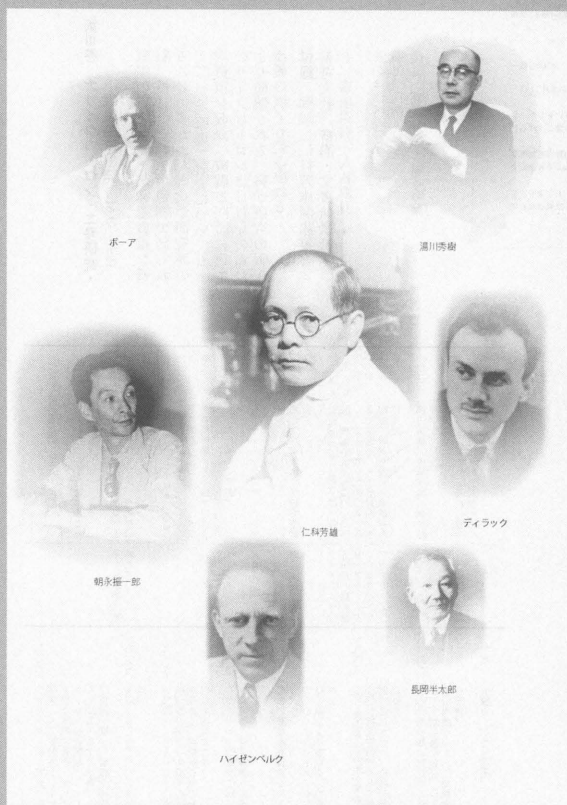
好評
発売中

各巻A5 ▶第1巻 322頁 本体3,000円 ISBN978-4-431-71211-3 ▶第2巻 270頁 本体3,000円 ISBN978-4-431-71222-0

▶第3巻 275頁 本体3,000円 ISBN978-4-431-71223-7 以下略

仁科秀雄(1890-1951)

仁科芳雄の業績に新たな光を当て、日本における現代物理学の基盤がいかに築かれたかをつぶさに伝える。仁科に連なり国内外で戦前～戦後に活躍した幾多の物理学者たちの足跡が、書簡という一次資料を通して浮かび上がる。科学と歴史研究の未来へ向け刊行する、昭和の物理学者たちの遺産。【2006年12月刊】



仁科芳雄往復書簡集

全3巻

現代物理学の開拓

中根良平・仁科雄一郎・仁科浩二郎・矢崎裕二・江沢洋編
協力 財団法人 仁科記念財団

みすず書房

財団法人 仁科記念財団

〒113-8941 東京都文京区本駒込2丁目28番45号

電話 03-3942-1718

ファックス 03-5976-2473

郵便振替番号 00130-5-135934

ホームページ <http://www.nishina-mf.or.jp>

E-mail: zaidan08@nishina-mf.or.jp